

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2005-296577

(P2005-296577A)

(43) 公開日 平成17年10月27日(2005. 10. 27)

(51) Int.Cl.⁷

A61D 7/00

A01K 29/00

F I

A61D 7/00

A01K 29/00

テーマコード (参考)

F

審査請求 有 請求項の数 1 書面 (全 5 頁)

(21) 出願番号 特願2004-145676 (P2004-145676)

(22) 出願日 平成16年4月13日 (2004. 4. 13)

(71) 出願人 504187560

杉田 敏恵

神奈川県横浜市旭区若葉台2-22-90

1

(72) 発明者 杉田 敏恵

神奈川県横浜市旭区若葉台2-22-90

1

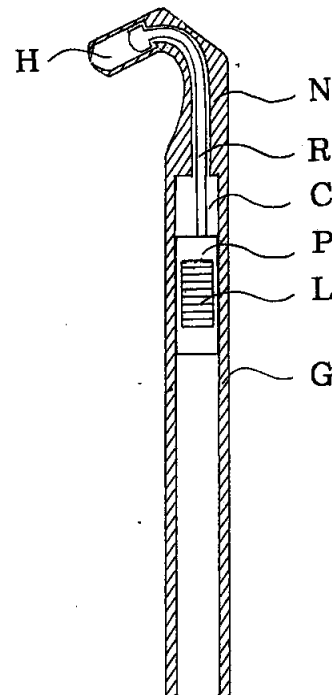
(54) 【発明の名称】 動物用経口投薬器

(57) 【要約】

【課題】 容易に被投薬動物の口内奥深くに挿入でき、投与した薬剤を確実に嚥下させることができるようにする。

【解決手段】 グリップ部▲G▼と、先端に薬剤保持部▲H▼を設けた頸管部▲N▼と、グリップ部▲G▼の中のシリンダ部▲C▼と、その中のピストン部▲P▼と、ピストン部▲P▼に取り付けて頸管部▲N▼に挿通し、先端部を薬剤保持部▲H▼に臨ませた、薬剤を押し出すロッド▲R▼とからなり、かつ前記ピストン部▲P▼は、これをグリップ部▲G▼の外側から駆動するレバー▲L▼を備えている動物用経口投薬器。

【選択図】 図2



【特許請求の範囲】

【請求項 1】

グリップ部▲G▼と、先端に薬剤保持部▲H▼を設けた頸管部▲N▼と、グリップ部▲G▼の中のシリンダ部▲C▼と、その中のピストン部▲P▼と、ピストン部▲P▼に取り付けて頸管部▲N▼に挿通し、先端部を薬剤保持部▲H▼に臨ませた、薬剤を押し出すロッド▲R▼とからなり、かつ前記ピストン部▲P▼は、これをグリップ▲G▼の外側から駆動するレバー▲L▼を備えている動物用経口投薬器。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、動物用経口投薬器に関するものである。

【背景技術】

【0002】

図4は、ペットとして飼育されている小動物（犬・猫・兎等）に疾病治療及び予防等の目的で経口投薬する場合に使用される従来の小動物用経口投薬器（以下、投薬器）を示す。その全体の形状は直線形で、先端部に薬剤保持▲C▼を設けた外管▲A▼と、その中に挿入されている内筒▲B▼とより構成されている。前記内筒▲B▼は、薬剤保持部▲C▼に保持された薬剤をその軸方向に押し出す操作部となっている。（特許文献1参照）

【0003】

従来の投薬器は、上述の構成となっているので、例えば猫に投薬する場合、図5に示すように猫の頭上から頭部を握り押え、鼻先を真上に向けて開口させ、投薬器を正面から口内の奥深く挿入している。

【特許文献1】 実開昭55-156721号公報

【0004】

投薬器は薬剤を食餌とともに投与できない場合、あるいは用手投薬の不可能な場合に使用する。しかし従来の投薬器の場合、図5の猫の例のように頭上より頭部を握り押さえて、強制的に保定するので、拒否反応を起してしまう。さらにはこの様な棒状の投薬器を目視される正面から口内に挿入するため、不安感、違和感によりいらだち、前肢でこれを払いのけようとする。このため、うまく投薬できない。かかる事態は、経口投薬による継続的加療を行えないものとし、生死さえ分けるものである。

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

上述の問題点を考察すれば、投薬器を用いての経口投薬を容易、確実なものとするには、体躯や頭部の強制的保定を必要とせず、被投薬動物に投薬器具を目視されず、すばやく口内奥深く挿入できればよい。

そこで本発明は、強制的保定を必要とせず、投薬器を目視されない位置から口内奥深く挿入でき、すばやく投薬できる動物用経口投薬器を提供することを課題とする。

【課題を解決するための手段】

【0006】

本発明の動物用経口投薬器は、上記課題を解決するためになされたもので、グリップ▲G▼と、先端に薬剤保持部▲H▼を設けた頸管部▲N▼と、グリップ部▲G▼の中のシリンダ部▲C▼と、その中のピストン部▲P▼と、ピストン部▲P▼に取り付けて頸管部▲N▼に挿通し、先端部を薬剤保持部▲H▼に臨ませた、薬剤を押し出すロッド▲R▼とからなり、かつ前記ピストン部▲P▼は、これをグリップ部▲G▼の外側から駆動するレバー▲L▼を備えているものである。

【発明の効果】

【0007】

この発明の動物用経口投薬器によれば、強制的保定なくして、器具を目視されず、薬剤保持部をすばやく口内奥深くに挿入できる形状をもち、薬剤の嚥下効果を高める水も同時

10

20

30

40

50

投与できるので、誰もが容易、確実に経口投薬が可能である。

【発明を実施するための最良の形態】

【0008】

図1は本発明の実施例の側面図、図2はその断面図である。

【実施例1】

【0009】

図2において、▲G▼はグリップ部、▲N▼はグリップ部▲G▼から伸びる頸管部であり、その先端が薬剤保持部▲H▼となっている。▲C▼はグリップ部▲G▼の中のシリンダ部▲C▼である。▲R▼はピストン部▲P▼に取り付けて頸管部▲N▼に挿通し、先端部を薬剤保持部▲H▼に臨ませた、薬剤を押し出すロッドである。▲L▼はグリップ部▲G▼の外側からピストン部▲P▼と、ロッド▲R▼を駆動するレバーである。 10

【0010】

次に本器の操作法を説明する。まず、投薬器の投薬準備を図2で説明すれば、薬剤保持部▲H▼を水中に入れ、レバー▲L▼を手前に引きシリンダー▲C▼部内と頸管部▲N▼内に貯水させる。レバー▲L▼の調節操作で水量は加減できる。貯水後、薬剤を薬剤保持部▲H▼内に先端より押し込み、投薬器の準備とする。

【0011】

ついで、猫に投薬する場合を例に説明すれば、図3に示すように猫を膝の上に置き、片方の手で猫の尾側から体を抱えるように首より下あごにかけて支えもつ。そして本投薬器をもう一方の手で後方より猫の口の側方から口内に挿入して、レバーを押し上げて薬剤と水を同時に投与する。 20

【0012】

上述のようにすれば、不安感や違和感も軽減され抵抗される事もなく、また、口の側方から投薬器を挿入するので容易に口内の奥深くに薬剤を投与することができる。さらに、薬剤投与と同時に水も投与できるので咽頭部が刺激され確実に薬剤を嚥下する。

【図面の簡単な説明】

【0013】

【図1】 実施例の動物用経口投薬器の斜視図

【図2】 実施例の動物用経口投薬器の断面図

【図3】 実施例の動物用経口投薬器の使用状態を示す斜視図 30

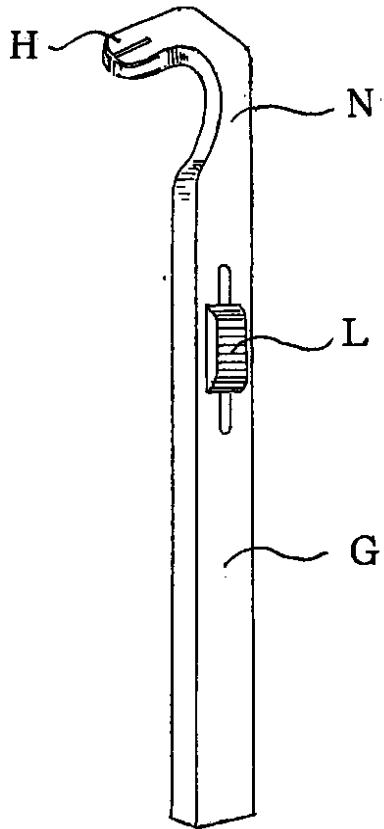
【図4】 従来の動物用経口投薬器の側面図

【図5】 従来の動物用経口投薬器の使用状態を示す斜視図

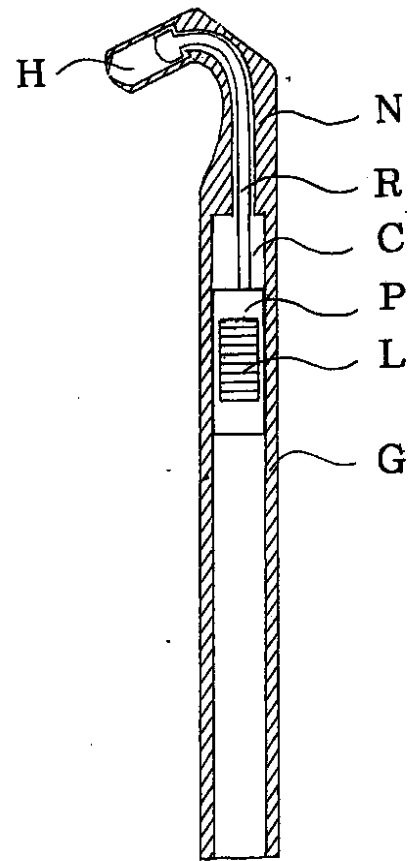
【符号の説明】

C シリンダ部
G グリップ部
H 薬剤保持部
L レバー
N 頸管部
P ピストン部
R ロッド

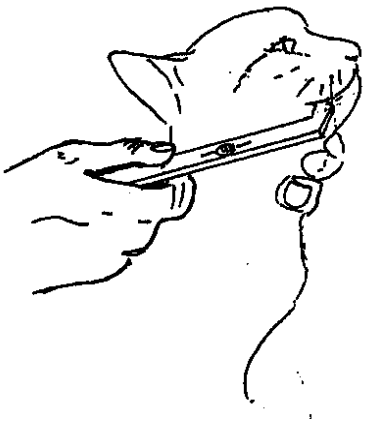
【図 1】



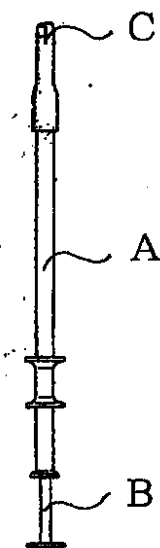
【図 2】



【図 3】



【図 4】



【図 5】

